

談話におけるメタコミュニケーションの諸相 —その包括的な理解を目指して—

丸 井 一 郎

1. メタコミュニケーションの狭い定義

1. 1. 認識関心

過去の出来事を想起し、未だ存在しないものを構想すること、それも何らかの記号、とくに言葉によって行うのは、人間にだけ見られる能力である。とりわけ複数の主体の間で、あるいは複数の主体が共同して過去の出来事を反省し、体験を組織することは、本能の導きに頼らない人間の生存にとって決定的に重要である。さらに微細に見ると、現在進行中の自己の思考過程や気分、同じく進行中の出来事への参加状況などを同時的継起的に「モニター」しながら、わずかの時間差でこれらを表現する能力も人間に固有のものである。まさに「我思う故に我あり」と今この瞬間に考えた、と考えそれを表明できる。これら長期的時間における、および瞬時かつ継起的な反省の両者に関わって特有のコミュニケーション現象がメタコミュニケーション（以下「MK」とする）である。これら両者が登場するエピソードは次のようなものになるだろう。Zは近隣の中年女性住民、Yは夫、Xは帰宅した妻で、町内会の会計担当の件が話題とする。

構成事例 1

先行する出来事 (D1)

Z1: こんばんわ、これ今度おたくが町内の会計です、お道具と書類です

Y1: あれえ、あそうですかあ、へええ、ううん、そっかなあ

Z2: じゃ失礼します、おやすみなさい

Y2: は、はああ、ども

事後の出来事 (D2)

X1: ただいまあ、これなあに

Y3: Zさんが、会計係のお道具です、って

X2: うちはもうやったでしょ、なぜちゃんと言わなかったの

Y4: なんだか変な感じがしてたんだけど、相手が疑ってないからつい、あのお婆さんいつもあの調子なんだから、

X3: いいわけしないの、でもたしかにあの自信は無敵よね

Y5: ほらね、明日説明して返してくるよ

ここでは元来虚構の例を詳しく分析することはしないが、このやりとりがひどく不自然ではないとして、D2: Y3-X2-Y4-X3-Y5に注目されたい。それぞれの発言内容は何に関連しているのだろうか。D2の直前に行われたらしいD1の中の出来事のどの部分だろうか。「なんだか変な感じ」「相手が疑っていない」とはどのような事態を言うのだろうか。「いつも」とはどれくらいの時間の範囲を言うだろうか。「あの自信」という表現が了解可能だとしたら、それはどのような(コミュニケーション)体験に裏打ちされているのだろうか。「いいわけ」とはどの発言のどのような性質を言うのだろうか。「ほらね」という発言はどのような行為なのか。我々はこの例のように、様々なやり方で自分や他人のコミュニケーション行動に言及しつつ(=MK)、コミュニケーションを行い、日々を暮らしている。

日本語とドイツ語の電話による談話の対照研究の含意として、談話の終結部でドイツ語の方が日本語談話より明確な定型表現が現れる傾向が大きいことが指摘される(Marui/Schwitalla 2004, 46ff.)。それら定型表現(「電話してくれて有難う」「ここらで終わりにせにゃならん」)の多くは、程度の差はあれMKの性質で特徴づけられる。社会集団間にMKに関する指向の差異があることが予測される。集団間の差異・同一を明確にするには、幅広くかつ分かりやすい基準が必要である。本稿では、MK研究のための鳥瞰的な見取り図を提示し、経験的研究への準備とする。そのために、まず、明確だが狭いMK概念の定義例を紹介し、より広い定義への出発点としたい。筆者の先の準備的な論考では、狭いが明確なテヒトマイアの定義(後述)を参考にした。本稿ではそこに含まれる問題点を検討しながら、よりよいMKの理解を目指して考察を進める。

1. 2. テヒトマイアによる定義

「定義する(definieren)」という行為も、言語行為の一つとして、行為の目的関連から自由でない。つまりその定義によって何が目指されているのかが定義行為自体の内実を決めることになる。この点で明確な目的設定を示した論述は、著名なHSKシリーズ第16巻であるText- und Gesprächslinguistikに収められたテヒトマイア(Techtmeier 2001)の"Form und Funktion von Metakommunikation im Gespräch"にある。そこでは進行しつつある談話(会話)の中に現れ、その進行自体に寄与し、談話の組み立てを実現するという意味で「談話中のMK」を定義することが目指されている。その定義の論述は「談話中のMK」をそうでないものから区分して行く過程である。つまり多くの関連するかもしれない事象が、そういう意味では、当然にも切り捨てられる過程でもある。筆者はMK研究の準備のための論考(丸井2005)で、テヒトマイアの所論を参考にして、MKの類をまずは行為内と行為外に区分した。本論校では、テヒトマイアの定義のより詳細で批判的な検討を通じて、新たな視点を提起する。

以下では上掲論文の1449-1453ページにあるMKの定義に関する叙述を順次追跡し要約する。個々の記述について逐一その箇所を示すことはしない。従来の独・仏・英語にお

ける用語の錯綜とその整理や研究流派への言及は省略する。以下でも「筆者」で丸井を、「著者」でその他の引用・言及された著述者を表す。定義叙述の区分とその番号は筆者による。

<定義過程の逐次的提示>

- ① MKの定義が定まらないことを指摘した後で、それにもかかわらず古典古代以来現代に至るまで、また哲学や心理学、言語学などさまざまな分野を通じて共通する出発点があるとする。それは人間には自己自身へと自己回帰的（反省的）関連を作りだし、それを世界の中でうまくやっていくことに利用する能力があるという認識である。分野により自己回帰性とかメタ認知といった用語で捉えられている。
- ② この反省行為は、言語や言語行為に限られない。とくに言語行為にあっては、反省しモニタすることが特別な役割を負っている。つまりコミュニケーションをうまく実現するには、今現在互いのやりとりの上でなにが起こっており、その流れのどこにたどり着いているのか、どのような場面の条件が支配的か、コミュニケーションの個々の歩みはどのような言語上の特性を持つのか、などなどについて休みなく反省し、分析しチェックすることが前提となる。
- ③ ここからそういった言語行為についてコミュニケーションすることができる（=MK）という同じく人間に固有の能力まではほんの一步である。MKとメタ認知の間には密接な関連があるが、両者は同一ではない。どのような類であれMKはコミュニケーション事象への反省（メタ認知）を前提とするが、その反省はコミュニケーション過程の中で様々に異なる帰結に至る可能性がある。つまりMKの発言ではなく、むしろ言わずにおくことや、相手に受け入れやすい表現や、非言語表現を用いるといった選択の可能性である。
- ④ <～についての反省>という側面は用語meta（ギリシャ語で「～について」の意：筆者補足）によく現れている（メタ言語、メタ言説、メタコミュニケーションなど）。では何についてかという点不明確である。いわゆる記号体系としての「ラング」なのか、複合的な相互行為過程なのか。言語について、ということなら最終的には文法用語による文法言説に極まる。ヤーコブソンに典型的に見られるように、「コード」への着目をMKの特性としながらも、実際にはコミュニケーションにおける理解過程が問題とされる。コミュニケーションについてのコミュニケーションということには言語的実現への関連づけも含意されている。メタ言語はMKに包摂される。
- ⑤ 「コミュニケーションについてのコミュニケーション」がMKの当面の定義だととして、まだ問題がないとは言えない。定義を広く取って、言語コミュニケーション事象に関わるすべての主題的取り立てを含めるか、それとも狭くして、MKが出現する実際のコミュニケーション過程内の諸相への主題的言及に限定するか。各々賛否の立場があるが、それぞれの背後にある認識関心を明確にすれば分かりやすい。一方で、とくに社会言語学的な研究者はMKを一般的な言語やコミュニケーション意識の表現と

捉えるが、他方でテキストや会話分析の研究者は、テキスト構成や相互行為的な会話の継起に有するMKの発話の意味に着目する。

- ⑥ 前者のように、ある話者集団の特定言語現象に対する態度や規範の知識を調査しようとするなら、ある発話が実際の談話の進行における特定側面を主題化しているか、それとも調査テーマの指標となるコミュニケーション事象自体であるかは二義的である。たとえば「英語語彙の多用・重用」現象について、雑誌投稿に否定的な意見が示されることと、専門家同士の会話のなかで類似の否定的発言がなされるのとでは、当該現象に対する話者の判断という点で同様に有意味である。
- ⑦ しかしテキストや会話における発言の役割の記述という点ではそうではない。会話分析では、直前になされた(英語語彙を含む)発言に対して相手が反応するという交互のやりとりの側面に対して優先的に注目する。先行発言が「メインストリーム」といった英語表現を含むことに対して他の話者が「なんだそれは、また英語かぶれだ、誰もわからんぜ」と応答するとしよう。この発話は英語の過剰借用に対する態度表明であるだけでなく、相手に対する批判とも解釈でき、場合によっては会話のその後の展開に特定の帰結を有することになる。
- ⑧ 「コミュニケーションについてのコミュニケーション」というMKの広い定義では、テキストや会話のなかの発言の役割を問題にする場合、不十分である。テキスト言語学や会話分析研究にとってMKはさらに狭く定義される必要があり、その際2つの点が導入される。第一にMKの関連点を進行中のコミュニケーションに限定すること、第二は機能的側面を導入することである。
- ⑨ 狭い定義ではMKが現れるコミュニケーションの進行過程の諸相が評価される。MKでない他の発話と共にMKは同一の相互行為の単位に属している。この単位がどの範囲にあるかについては議論がある。テキストや会話の境界についてと同じく、コミュニケーションの多様性からして一義的には答えられない問題である。しかし周辺的な事例は別として、ひとまとまりの相互行為の単位や進行するコミュニケーションの歩みという概念で作業することは十分可能である。MKが関連する進行中のコミュニケーションの諸相ということは何を具体的に言うのかという問題は残る。既に行われたあるいは予測される発話自体に限定しない。実際に行われた発話の背後にある諸現象に関連づけをするという意味で、MKの発話は相互行為事象の分析に特別の意味を持つ。
- ⑩ テキストや会話の中に本来のテーマから見れば副次的な構造や従属的な役割を持つ部分が見られる。これらは多くの場合MKである。その機能はコミュニケーション自体の進行に影響を行使し、それを支えることにある。発生したあるいは予測される誤解を解き、ある行為の否定的な帰結を是正するなどの働きをする。MKの定義に機能の要因を入れるか否かについて議論があるが、著者は「MKとは進行中のコミュニケーション過程についてのコミュニケーションであり、その進行過程を支える機能を持つ」と定義する。ちなみに、会話進行支持機能とは、MKが言及する発話やより大きな相互行為事象の理解、それらの容認・受け入れ、そして発信者が意図しているコミュニ

ケーション行為の実行可能性の3点に、そしてそれだけに関連する、とされる。

<提示終わり>

以上テヒトマイアによる、会話の中のMKを定義する論述を要約した。上で述べたように、このある意味では一貫した「狭い定義」の行為の過程で何が切り捨てられたのか、さらに著者は言及していないが、筆者から見て広い意味でのMKに属する事象を補足しながら、我々にとってより望ましいMKの像を追求する。

1. 3. 狭い定義で捉えられない事象

上に提示した最終定義項（第10項：第8項と9項が準備過程）から遡って見ていくと明らかになることがある。「進行するコミュニケーション過程について、その過程内で行われるMK」とその背景的諸関連は詳論されているが、それ以外の事象は十分な取り扱いを受けずにいわば放置されている。著者の言う社会言語学的研究が扱うのは、「話者集団の特定言語現象に対する態度や規範の知識」とされ、事例としては「英語語彙の過剰借用」が挙げられている。「進行するコミュニケーション過程についてのMK」ではないが、ある種のMKと見ていい事象は、著者が挙げる社会言語学の対象としての「特定言語現象に対する態度」以外にも多くある。

たとえば狭い意味でのMK、およびより広範囲の背景的なコミュニケーション事象に関連するMKが互いに織りなされる可能性は上のD2に示されている。略記し再掲する。

<X1：ただいまあ、これなあに//Y3：Zさんが、会計係のお道具です、って//X2：うちはもうやったでしょ、なぜちゃんと言わなかったの//Y4：なんだか変な感じがしてたんだけど、相手が疑ってないからつい、あのおばさんいつもあの調子なんだから、//X3：いいわけしないの、でもたしかにあの自信は無敵よね//Y5：ほらね、明日説明して返してくるよ>

この模擬構成例がさほど不自然でないとして、以下の3種の言及領域が区分される。

い) 現在進行中のコミュニケーションD2自体への言及

(X3前半「いいわけしないの」、Y5前半「ほらね」)

ろ) 先行コミュニケーション事象D1内の項への関連づけ

(Y3=発言引用、X2「言わなかった」、Y4前半「疑ってないからつい」まで)

は) およびそれらの背景をなす共有された体験領域 (D1のさらに外)

(Y4後半「いつもあの調子」、X3後半「あの自信は、」: 行為自体あるいは行為に見られる人物の性質)

上で見たテヒトマイアの狭い定義に適合するのは (い) だけである。しかし他の2種類も明らかにMKの種類であると言える。対面あるいは非対面の談話形式の研究にはこれら (少なくとも) 3種類のMKの複合的な出現様態を顧慮することが求められる。

この点でテヒトマイアの論の展開には、不備とは言えないが、見落とし（あるいは説明のない除外）が指摘できる。上の定義過程の第6項と7項で、会話においてMK発言の果たす役割は、当該会話の進行自体に帰結を有する点で、雑誌投稿と同一に扱えない旨を主張する。これはしかし対面談話と制度的なメディアに媒介されたコミュニケーション形式の技術的外形的な差異にすぎない。雑誌への投稿に対しては、当然の遅延を伴って、つまりその掲載以降一定の時間が経過して、反論なり賛同なりの意見表明がなされるし、そのときには先行する投稿（＝発言）の全体や（個々の表現形式に至る）部分に対してMKの発言（＝テキスト）が形成される。「先月号でN氏が述べたように」といった表現を参照されたい。著者の注目は特定の対象領域にあまりに強く向けられ固定していると云わざるをえない（という論評は、明らかにテヒトマイアの定義に入らないMKの類である）。

定義経過をさらに遡ろう。第4項でメタ言語（表現）はMKの行為に包摂されることを述べる。（これを受けて5項でMKとはさしあたり「コミュニケーションについてのコミュニケーション」だとされる。）ここで著者はメタ言語の典型例として文法用語を挙げている。あるいはヤーコブソンの言う「コード（ラング）」への注目として形成される表現を指摘する。MKに包摂されるものとしてのメタ言語（＝様々な表現形式）として、（言及されていないので）さらに付け加えるならば、ある種の語彙や定型表現を挙げることができる。「あつかましい」「人の話を取る」「沈黙は金」「舌先三寸」「一日に一度だけしゃべる（＝休みなくしゃべる、原型はドイツ語）」などである。これらもMKの類型として一定の枠内で説明されるべきである。

さらに遡ろう、第2項と3項では「メタ認知」とMKとの密接な関連およびそれらの非同一について述べる。関連の内実が詳論されないのは紙面の制約などの故であるとして、ここでは非明示的ではあるが、心理的認知現象とMKは同一の現象レベルであると見なされているように見える。第2項では刻々と進行する認知現象とコミュニケーションの進行との絡み合いが述べられる。

最後に、定義行為の最初に何が言われているかを、筆者による要約ではあるが、第1項の中心部分に注目して検討しよう。

<古典古代以来現代に至るまで、哲学などさまざまな分野を通じて共通する出発点は、人間には自己自身へと自己回帰的（反省的）関連を作りだし、それを世界の中でうまくやっていくことに利用する能力があるという認識である。分野により自己回帰性とかメタ認知といった用語で捉えられている。>

後ろから遡ってみると、「自己自身へと回帰的・反省的な関連を作り出す能力」は、心理的認知レベルに限定され、MKもそれに対応するように構想されていることが分かる。しかしながら、「古代以来現代まで哲学や言語学などに共通する認識」には、心理的認知だけが対応するのではなく、著者自身が言い換えに用いたドイツ語表現 "nachdenken", "Reflexion" という表現の重要な意味成分である「反省」「顧みる」「省察」という要因も確かに包含されており、これもまた人間の生き残りに重要な働きをしてき

たと言える。とくにそういった反省行為は間主体的に行われることを強調したい。上で例示したある種の語彙や定型表現（「あつかましい」「人の話を取る」「沈黙は金」など）は、繰り返し出現することで多くの人々の反省的意識に捉えられ言語化される（＝MK）相互行為体験が社会的に累積する過程を前提とする。テヒトマイアの論には、そのように捉えたMK表現の形成に関与したらしい間主体的社会行為過程への視点が希薄である。

全体として顧みると、「コミュニケーションについてのコミュニケーション」という一般的で穏当な定義が退けられたわけではなく、著者はその定義に適応するあるタイプのMKを、それなりの妥当性をもって特性づけたのだと言える（注1）。するとこれは厳密な意味で対象全体の定義といえるのかという省察に導かれる。よりよい定義の構想には、全体を見渡して個々の要因を定位する必要がある。（この章は全体として、テヒトマイアが書記テキスト生産の形で行ったコミュニケーション行為に関するメタコミュニケーションになっている。）

2. 生態論的な理解：言及行為の実現様態

前章ではテヒトマイアの狭い定義に属さない事象をいくつか述べた。これを体系的に関連づけ提示することを試みる。そのためには上でも指摘したように、定義という言語行為の目的を明示する必要がある。ここでの定義は、テヒトマイアの「進行するコミュニケーション過程（中心的対象は対面談話）について、その過程内で行われるMK」だけでなく、およそMKとして把握しうるできるだけ多くの事象を分類し関連づける枠組みを示すことを目標とする。

いまコミュニケーションをKと略記し、さらに一般的定義を少しだけ精密にして「K1についてのK2＝MK」と表す。このK1（言及対象）とK2（言及行為）にどのような種類のコミュニケーション、つまり表現や行為が措定されるかによって、全体として当該のMKの性質も変化する。逆にMKの様々な類型をこのやり方で区分できる。

まずK2を含むMKが口頭表現および非言語表現を中心とする対面談話か、書かれたテキストか、その他の様々なメディアで実現されるかを区別する。テレビ放送中のトークショーや特定の著書について対面談話の話題とすることもできるし、対面談話という実現形式の出来事について手紙で報告し論評することもありうる。政治家の発言は新聞紙上のカリカチュアの形式でコメントされる（K1やK2に属する言語表現の添加あり、あるいはなしで）。演劇や映画や漫画作品では、特定の発言の再現を含む比較的長いシークエンスが、現実に行われたあるいは歴史的に伝承された相互行為事象への論評・評価行為（＝MK）になっている可能性がある。

つまりMKの生態論的（エスノグラフィ的とも言える）な見渡しと定義には、それ自体重要であるとはいえ、原則的に口頭の対面談話への限定はありえない。MKの実現形式とMK自身の性質には深い関連があるとはいえ、人間の普遍的能力としてのメタ能力

は、多かれ少なかれ記号的に媒介されて、多様な形で、たとえば制度による枠付けなどを伴って現れると考えるべきだろう。以下簡単に整理しておく。

- ・言語的（口頭表現、書記表現）
- ・非言語的（表情など身体表現、身体接触、音声表現）
- ・多メディア的（言語、画像、映像など）
- ・間メディア的（議会での答弁を一こまの風刺画で）

上でテヒトマイアが挙げた英語からの借用に関する雑誌投稿の例について批判的にコメントしたが、複数の書記テキスト間では、対面談話と異なり、K1とK2との瞬時の相互関連はありえない。遅延と相互隔離が原則である。MKを実現するために行われる他の書記テキストへの参照や関連づけには、歴史的に各集団・言語において当該の領域（行為類型、制度）に応じた特別な手順と表現形式が発達してきた（「本歌取り」、法律条文の引用、論文における出典記載などなど）。一方、この論述でもそうだが、同一書記テキスト内では、前後の記述への（相互）指示、照応関係の明示が頻繁に行われ、行為内的なMKが実現される。それは書記テキストに限らないが（口承文芸などにも頻出する）、その構成の明らかな特徴の一つでもある。

以下の論述や例示では、手順としてテヒトマイアの狭いが明確な定義を徐々に拡大する目的から、とくに断らない限り対面談話を中心に論じる。他の実現経路に言及する場合は明記する。

3. 言及対象の類型による区分

最初の大きな区分は、K2（言及行為）が、実際に行われた、または現に行われつつある出来事、あるいはこれから生起するだろう事象としてのK1について何かを述べるのか（一回性）、そのような出来事が繰り返し体験されることから自覚され命名される形で、一般的にある人物や集団のコミュニケーション上の傾向や性質について述べるのか（繰り返し性）という点である（これらを類型AとBとする）。以下ではまず出来事の個別性を特徴とするA類型を詳論するが、B類型には、一例として「女性はおしゃべりだ」「日本人（の物言い）は丁寧だ」といったジェンダーや想定上の集団に関わる固定観念を表す定型表現の対象が属する。その際、いつの時代のどの地域のどの人々がどのような状況でどのような行為・言動を、といった限定は明示されないのが特徴である（後述）。

3. 1. 出来事の個別性を特徴とする類 (A)

K2の言及対象であるK1が一回性を特性とする場合、つまり個別の出来事と出来事を構成する全ての細部（の意味と意義）である類は、言及対象の出来事が現在進行中であるか、時間距離は様々として完結した過去の出来事であるかによってさらに下位区分される（これをA1とA2とする）。以下ではこの現在進行中の出来事をKLとする。なお以下では未来における可能な相互行為事象への言及を対象としない。

同時進行類型は、言及対象の出来事に言及者自信が参加しているか（＝テヒトマイアの類型、これをA11とする）、目撃・傍観しているだけであるか（＝A12）によってさらに下位区分される。テヒトマイアが詳論するように、言及対象と言及行為自体の間に緊密な関連づけが行われ、それがKL自体の組み立てにフィードバックしその進行を形成することになる。この場合がいわば純正な行為内的MK事象となる（上の構成事例のくゝの項）。対面談話では、これ以外が拙論（丸井2005）で述べた行為外的諸類型となる。

各集団で進行中の談話事象自体を対象とするMKに特有の（定型的）表現が形成されていることはテヒトマイアの指摘するとおりであり（Techtmeier 2001, 1453ff.）、この領域での日独対照は興味深い。たとえば日本語では、対面談話の応答位置（先行する話題関連の発話を受ける）に出現する定型的表現に限定して、全く任意に列挙しただけで以下のようなものがある。ドイツ語にも独自の表現、その類型と分布があると想定される。

そうだな、まいわばそうだね／が、ちょっとそれはー／それはちょっと、（おお）
 なんかゆうとるぞ／何か言ってるじゃないか、なんて言い方（ですか／じゃ、）、
 なんですかそれは、なに／なん いいよるん／いつてんの／いつてやがんで／ほざ
 く／ぬかす、そうも言える（よな／よね）、そんなこと言っているのかな／大丈夫
 （ですか）、（おいおい）ずいぶん言い方（だ／ね／ですね）、（なんですか）言う
 に事欠いて、口を慎みなさい、言葉がすぎる、それはxということ（ですか）、う
 そー、ほんとかよ、どうゆうこと（かね）、どうゆうこっちゃ、なんでえ、なぜ／
 なんでそうなる、ええ／へえ そうかなあ、信じがたい話ですね／にわかには信じ
 がたい（はなし）ですね／な、そういうこと（か、ですか）、（あ、へ、ああ、へえ）
 なるほど そういうこと（か）、（ああ、へえ、なるほど）そういう思いで（ね）、そ
 ういうことでね、（それ）わかるよ／わかりますよ（それ）、それを言われるとな／
 と弱い、今それを言われても（こまる）

A12には、たとえば口論する夫婦を第三者達が傍観しながら「二人とも何もあそこま
 で言わなくてもいいのにねえ」「でもけんかするほど仲が良いっていうじゃない」といっ
 たコメントをする場合の言及対象が相当する。前の発言は個別の表現と行為（その細部）
 に関わり、後者では、「繰り返し」タイプ（B）の表現が引用的に使用され、行為事象

(口論)の全体および当該の人物像に関わる。

完結した過去の相互行為事象(KPとする)に言及する場合も同じく、KLの参加者がKPに参加していたのか、自身は参加せず傍観したあるいは単に聞き及んだのかによって下位区分される(=A21とA22)。自身が参加していた場合、全ての完結した直接体験がそうであるように、言及対象は拙著(丸井2006, 16-17)で述べた相互行為事象の3大側面<社会行動、生理・心理過程、記号態>のいずれから、いわば無限に選び出すことができる。一方傍観や伝聞では、文字通り外から眺めただけということで、たとえば出来事の背景的事情や当事者の心的体験について言及可能な対象ははるかに限定される。

当該の出来事にKL参加者が関与していた場合の言及対象(A21)は、現在進行中のKLに参加している他の人物も当の出来事(KP)に参加していたか、傍観していたり、または事前に伝え聞いていたか、あるいは全く関与がないかによってさらに区分される(A211, A212, A213)。

相手との間に体験の共有があれば(A211の場合)、たとえば事後の協同的反省的な体験組織の談話において選択・焦点化可能な言及対象は予示不可能なほど膨大であるが。一方、共有がなければ体験内容自体の提示手続きが必要となる(共有の意義については丸井2006, 246-265を参照)。後者の場合、関連の対面談話は、たとえば当事者がある程度の長さで説明の発話を続ければ物語行為の、あるいは他の参加者が問い続ければ「事情聴取」の様相を示すこともありうる。他のKL参加者が当の出来事(KP)の傍観者であるか、あるいは事前に伝聞などによる情報を得ていた場合をA212、全く関与しない場合をA213とする。たとえば前者の関連では、

「あんた見とった?」「ああえらい叱られとったな」「課長機嫌悪い」「あんたがなんかゆうたんやろ」「よう知つとるやんけ」「しらん」「じつはな、」
といった連鎖が、A213関連では、

「あんた親でも死んだような顔やな」「課長の機嫌が悪うて」「課長て」「あの小判鮫」「サメがなんやて」「いやじつはやね、」

といった連鎖がありうる。上の構成事例の(ろ)はA212の類となる。同じく(は)の項は、基本的には同類(A212)だが、定型的表現(「いつもあの調子」「あの自信は無敵」)に結びつく既成概念の個別事象への適用という性格が顕著で、次節に述べるB類への関連が明らかである。

KL参加者自身が参加していなかった、つまり傍観したあるいは伝え聞いた具体的事象(KP)については、他のKL参加者もその目撃あるいは伝聞の場に居合わせていたか否かによってさらに下位区分される(A221とA222)。類型A21の場合より限定されるとはいえ、傍観・伝聞の体験自体の共有はそれなりに言及対象の多様性を保証するが、共有がなければA212/213の場合よりもさらに言及可能な対象項目が少なくなる。可能な連鎖は以下のようなものであろう。

「ヨーコがミーコにxやゆうたて聞いた?」「しらん、なんでそんなんいうんやろ」
「わたしにきかんといて」

しだいに共有性が減少するものの、これらの行為外的MKは、参加者のその後の関係や、コミュニケーション行動のあり方に影響を与えるという意味で、テヒトマイアが強調する行為内的類型が行為の進展自体に影響することに対応し、かつ行為構成のより高次（長期）レベルで類似の位相にある。時間のスパンが異なるとはいえ独自の機能という点で希薄になるわけではない。もちろんここで論じている類の中には（とくにA222）、「目撃」報告者以外の他の参加者に関わりのない事象に関する談話も含まれる。たとえばA222で、MKの言及の対象が未知の人物とその行為である場合、聞く側は「返事にこまる」（定形表現！）こともありうる。

最後には、まったく任意の例示として、そういうことがあり、そう言う人がいるという一般的な話題にまで希薄化する。その場合と比べて、これまで挙げた類は、全て共主体的・間主体的に行われる共同自己省察の働きをすることで、共在・共有関係の創出、維持と進展に重要な機能を果たす。当該の相互行為事象自体が争いに類するものだとしてもそうである。したがって、最後の類型として、現在進行中の相互行為事象（KL）の参加者に関わらない、任意の事例として話題に提供される相互行為関連の言及対象をA3とする。この論述でテヒトマイアの叙述に言及するのもその一種である。繰り返し性で特徴づけられるMKのB類をA3の（ある部分の）下位区分だとしてもできる。詳細は以下で述べる。

個別事象を言及対象とする談話のMKについて、ここまでの論述を全体として振り返る。進行中の出来事に共同参加していれば、あるいはその限りで、争いの場合であれ、その参加の事実自体が緊密な共有を保証する。言語表現だけでなく、相互行為上の意味作用に関わる非常に微細な記号的表現や兆候的な提示（顔つき、声音、手指の震えなど）が、きわめて短時間のうちに捕捉されMKの対象になりうる。次に言及対象が過去の出来事であっても、共通の体験からは予示不可能なほど多くの事象を、あらかじめ対象として記号的に構成し説明することなしに、話題として取り出すことができる。その一形式としてMKがありうる。体験の共有の度合いが減じるに従って、話題の対象の記号的構成に労力が必要となり、常にではないが、ある場合には物語的な談話の実現形がありうる。当該の出来事に関して体験の共有が少なくなるほど、記号的言語的提示への負荷が増し、理解確保のためにK1の言語的な提示自体（K2）がある種のMK（テヒトマイアの類型）の対象となりうる。これらは全く任意の話題としての報告事例を境界例として、その相互照射の性格において、以後の参加者間の関係を変更し維持し進展させるという点で重要な機能を持つ。（たとえば、筆者がドイツ語で書いた本稿に相当する論評をテヒトマイア氏が目に留めているか否かで、両者の対面談話はそれなりの差異を見せるだろう。）

ただし、ここでもう一度前の章（「言及行為の実現様態」）を想起しつつ注記すると、KMの実現様態は相互行為類の媒介形式（対面談話だけでなく書記テキスト、たとえばこの論述）にも対応して多様であり、制度の要因などで複雑化する。ここでは日常的な談話の類を中心に見てきた。遅延と隔離が特性である制度化された書記テキスト間の相

互参照（手紙でのやりとり、論文のコメント）などはむしろ理解しやすいMKの実現態である。文字化に伴って口頭表現より限定的かつ明確な表現が要請されることも一因であろう。近年の電子媒体によるやりとりの一部では、文字による制限を絵記号の表現性で補い、対面談話的性質を実現する現象も知られている：\ (・・) /。

この節の最後に、上で見たような相互あるいは共同の省察ではない例として、マスメディア関連の一事象を見ておく。これには放送中のテレビ番組における発言に対してコメントし、その後の発言を予測しさらにそれについてコメントする場合などが当てはまる（基本的にはA3の対象類型になる）。同じく現在進行中であるとはいえ、テレビ番組内に提示された出来事への言及はその出来事（KL）の進行に影響を与えない。筆者の知人（ドイツ人）にこの分野の名人がいて、彼がテレビの前に座ると無事で済む登場人物はいなくなり、その場の視聴者の間に笑が渦巻くことになる。この場合現在進行中のコミュニケーション事象が少なくとも2つあると考えられる。KL1がテレビ番組内の進行事象とすると、それについて言及し（それについて笑う）のはKL2として区別できる。当然ながら、談話事象KL2の内部では行為内的MKが可能である。（「あんたほんとにまねがうまいなあ」「x x やて、も苦しい笑わせんといて」）

3. 2. 繰り返し性を特徴とする類（B）

ここではB類型の言及対象と関連のMK事象を詳論する。上のA3の類で言及したように、一般的に任意偶発の話題として言及対象である人物や集団のコミュニケーション上の傾向や性質が関連項となる。今ここで観察される相互行為上の出来事が、それ自体の意味と意義で理解・評価されるというより、今ここでの出来事ではなく、あるいはその出来事をも含めて、「普通、一般に」「最近」「現今」「世間で」「我々のところでは」「こちらでは」「あちらでは」「当時は」「昔は」、つまりある時代のある人々の集団内で繰り返される相互行為体験から意識化され析出された共通の認知・認識、およびその言語的命名がここでの対象類を特徴づける。以下では、まずテヒトマイアが第7項で挙げた例をここで再び取り上げ、彼女が切り捨てた事象をその性質にふさわしく再評価することを試みよう（←テキストの進行を作り出す行為内的MKの叙述）。

「なんだ、また英語かぶれかよ」（現代の日本語なら「またカタカナことばかよ」とでもなるか？）といった話者の態度・志向・評価を表す類の表現は、その後の談話の展開に影響を及ぼすという点で、テヒトマイアは行為内的MKの機能的意義を強調する。しかしこのような発言はおよそどのような状況で出現し、それは具体的にどのような前提のもとに可能なのだろうか。背景として、かつては連合王国、現今は米国の覇権下のグローバル化現象、非母語としての英語の能力、教育制度、それらの社会的評価、職業集団、専門分野、研究課題、利害関心などなどについて具体的な要因を枚挙できるはずである。

さらに現象に即して言えば、相手がたった今提供した目前の発言事象を一事例として、そのような言動をする人々が少なからずいることが知られているということである。目

前の事象は、唯一固有の出来事である談話の展開への貢献であると同時に、広く知られている（知られてきた）一般的現象の一つの実例と見なされる。既知のMK関連の概念と対応する表現、たとえば「口は災いの元（＝発言には用心）」などが目前の事象に適用されることに意義を見ることは、全くの一般的観察にすぎないが、日本語社会でより多く行われるようである。テヒトマイアが自明事として前提し詳論しない背景事情がどうやら肝心であるように見える。なお指摘するなら、第7項目で著者が比較の対として提示した2事例は、以上の論述から分かるように、対象類型の差異によって区別されるべき別種のMK類に関わるのであり、彼女は「私にはこちらの方が面白い、重要」と言いたいわけである（これもMK）。

結論的に言うと、非常に複雑な多重の相互行為ネットワークとして成立しているある特定社会の中で、その（中のある集団の）複数の成員が繰り返し類似のコミュニケーション（相互行為）体験をするという社会的事実がその背景である。個々の出来事の一時的な意義の面ではなく、繰り返し体験されることで次第に類型性が意識化され、ついには言語化され、命名される複数事象の共通項が問題となる。

その際、当該事象についての中立的な叙述も可能であるが（「外来語の多用」、むしろ評価や志向が主題化されることが多い（「外来語の濫用」「横文字崇拜」）。A類型のMKは、とくに上で詳論した対面談話においては、特定の参加者間の共有性と関係の維持・進展に関わるが、ここではより一般的な社会的規範意識が前面に出る（「アルサロで人生相談するやつがおるかあ」）。命名表現の明確さが規範関連の、あるいはその他の観念の明確さに対応する。

繰り返し性において意識化される事象に対して、間主体的に了解可能な言語形式（命名）が成立しているというのは、否定しがたい重要な社会的事実である。そこにこそ、忘れずにいる、反省・省察するという個的領域だけでなく、共同で体験を組織し（相互に報告された類似の体験から情勢・傾向を読む）、話し合うという共同作業で世界を理解しその理解を共有するという人間達の生存、つまり社会の存立にとって不可欠な能力の発露が見られるからである。その共同了解の内容が、たとえば現代の日本社会に生きる我々から見て、不穏当あるいは理解困難であるにせよ。

命名の確定度には様々な段階があり、ある段階ではそのような命名の妥当性自体が論議の対象でありうる。このB類型では、その下位区分について、言及対象事象の明確度に対応する命名表現の確定度という目印を採用する。もちろん明確度や確定度は相対的な性質のものである。何が言及の関連項であるかがどの程度明確かという基準は、対面談話を主としたA類型の分類でも同じように当てはまる。争うのであれ、そこでは参加者間の個別体験とその付随および背景情報の共有がその規定要因であった。

この関連で強調したいのは、MKの行為ではなく、テヒトマイアが結局はMK行為に包摂されるとしたメタ言語表現の重要性である。定型化した言語表現は行為の類型と手順、関連項をいわばコード化している。対象事象の明確度がきわめて高い類型は、①語彙項目（「口論」「ことわり」「慇懃無礼」「やさしい」）、特に専門用語（「名誉毀損」、

「虚偽の申告」)にまで定型化された類である。拙著で述べた確定的評価表現(丸井2006, 160)もこれに属する。次に、②慣用句、常用句、ことわざ、定型句、常套句など様々な程度に変異する定型的表現が位置する(「お茶を濁す」「目は口ほどに物を言い」)。最後に、③利害関心の対立を前提に「争いのまと」でもある概念を表す表現をも含んで、それぞれの時代や地域で目下の社会的関心の対象となる相互行為事象の命名表現(「英語の濫用」「ためぐち」「指示待ち族」「かわいい(ただし現代的用法)」など)が位置する。以下ではこれらについて補足する。

① 語彙など定型表現とその対応概念

「近頃の若いもんは無礼だ」という発言は、実際に対面談話の状況内にいる誰かの具体的な発言や態度についてではなく、また直接的な会話の体験事例でもなく、目撃・傍観や(とくにマスメディアによる)伝聞などに基づいて、想定されたある範囲の人々の言動に関連して一般的に通用するものとして行われる(個別事例に適用される場合については以下に述べる)。状況の中で指示可能な具体的事象に関連づけられるA類型との対比で言うと、ここではK2の(=MK行為)の状況離脱性が最大となる。

一方で、定型によって明確に表現された概念は状況への直接的な関連を持つ。ヘルマンズ(Hermanns 1995, 80f.)がコゼレク(Koselleck)に依拠して主張するところを敷衍すれば、語彙項目にまで定型化された表現は行為概念を明示し、適用されれば可能な行為状況を形成することに対して大きな影響力を発揮する。「洗神(=神をけがす)の言葉・行い」という概念に相当するMK表現は、しかるべき宗教圏では、生命に関わる重要事だったし、今もそうである。どのようにこれに該当する出来事が発生し、自己の言動についてこの表現が向けられたら何が起こるのか、どうすればいいのかについて、現代日本列島人である我々の多くは無知であるが、ある集団では一定の、言語的だけではない相互行為過程が動き出すことになる。

日独対照の観点から興味深いのは、拙著その他でも指摘したように、ドイツ語では日常的に多く使用される論弁関連の語彙(Argument = 論点、folgern=推論する、haltbar=論点として保持できる有効である、など)が、日本語では術語(とくに翻訳語)以外には多く見られないことである。これは一般的に、言語行為を表す表現(とくにいわゆる発話行為に関わる動詞)にも言えることで、専門的でない日本語表現としては類型横断的に「～という」による構成形式が優勢である(丸井2006, 182)。

② 慣用句など定型的表現

コミュニケーションにおける一定の態度提示・行為の様態・表現の性質について「お茶を濁す」「物言えば唇寒し」「理屈と膏葉はどこにでもつく」といった定型的表現が対応すると観念されている。この場合は、該当する行為の主体でありうる不特定の人々(「世間の人」)の行い一般が対象とされ適用される。つまりある時代のある地域のある状況である人物がある行為を行えば、そのような行為は普通「でしゃばりだ」といった評価を表すMKの対象になる、ということが明示されてはいないが通用して

いるわけである。MKの定型的表現に現れた社会的規範（価値観）の社会文化間比較が構想できる。たとえばドイツ語の常套句「彼は一日に一度しかしゃべらない（＝いつもしゃべっている）」は、活発さを肯定しても、否定的な評価と結びつかない。同じく「人にしゃべらせない」も、「専横である」という日本語と同じ含みのほかに、「指導的で有能である」という肯定的側面を持つ。

③ 新規・形成中の表現

この関連で、多くの興味深い現象を報告し解説しているのは、『やさしさの精神病理』（大平健、1995）である。著者の挙げる事例は、世代間で異なる意義関連を有する表現「やさしい」によって捉えられたMKの事例に満ちている。「あのせんこう、言い方がきもいやん」という表現を使用するのは、あるいは理解できるのはどの世代（まで）だろうか。少し以前なら「言うことが根暗じゃん」といった表現も使用された。比較的最近の顕著な現象は、語彙「かわいい」のMKに関連する用法である。この表現は事物や動物と同じく、人物の外見、態度や発話事象にも適用される。かつては様々な意味で「上位者（身分、性別、年齢などなど）」から「下位者」への適用が通例であったこの表現が、近年ではとくに若い女性の話者によって無差別に使用され、とりわけ「若くない」男性の違和感を引き起こしていることが知られている。講義中に機器の操作ミスなどで当惑し照れ隠しの発言をする中年過ぎの男性教員は「じさまかわいい」とでも評されるのだろうか。（注2）

3. 3. 繰り返し類型（B）の個別類型（A）への適用

以上の諸関連で重要なことは、B類型の対象について形成されてきたMK表現は、既成の表現として、A類型の対象（個別事象）に関して、いわばそれを一事例と見なす形で引用され適用されるという点である。「恥知らずという言葉があるが、お前の言い方がそうだ」といった発話や、ドイツ語の例として、「それをあつかましさの極みというんだよ *das nennt man Gipfel der Frechheit*」といった言い回しの対面談話における（A類型としての）使用は希でない。

既成のMK表現が個別事象に適用されることについてもう少し詳しく考察しよう。

ある地域（日本列島上のある都市）、ある時代（「戦前」、現在も？）、ある状況（学校や会社など制度内、教師と学生間、上司と部下間）で、ある人物（学生、部下、特に女性）がある行為（活発な発言）を行えば、否定的評価として、

でしゃばり、なまいき、あつかましい、さしでがましい、わきまえない、分をわきまえない、身の程知らず、無礼な、口が軽い、つつしみが無い、ひかえめでない、謙遜さが足りない、いなかも、不躰な、下品な、ことばがすぎる、軽率な（物言い）、傍若無人、考えなし、ものの言い方を知らない、お里が知れる、山出し、はしたない、女／ヒラ／学生のくせに／の分際で、おてんば、はずっぱ、とびあが

りもの、こいつはものを言うぞ、くちばしの黄色いのが、口から先に生まれた、しつけができていない、聞くに堪えない、いたたまれない、口だけはたつ、親の顔が見たい、自分がどう見えてるかも知らずに、口にしまりのない、(男性に関して) 女みたいにおしゃべり

などなど既成のMK表現(語彙項目、慣用表現、常套表現、多くは述語的)が適用されることが可能である(「おいおい君のようなのを傍若無人というんだよ」、「君、弁はたつようだが、所かまわずそんな言い方していると、わきまえがないと言われるぞ」)。活発な発言を肯定的に評価する語彙項目など定型的MK表現はごく希であり、「はっきりとものが言える、元気でよい、(これからは、女でも!?) そのくらいの口がきけなければ/ものが言えなければ、しっかりした/自分の考えがある、誰でも自分の考えを持つのはいい」などがやや定型的な表現であろう。「聡明、利発、利口」などは可能な肯定の語彙表現であるが、発言事象よりは発言者の性質に焦点があり、その言明の後で上記の否定表現によって有効性を無化できる。(「利発だけど、その言い方はx/もともとがx」)

これらの表現、特に否定的評価表現が2007年現在どのように使用されているかは、それ自体調査研究の課題であるが、この百年という単位で見れば、我々は、若い人々(とくに女性)が活発に発言することについて、年長者(とくに男性)が否定的に評価する定型的MK表現のほうが肯定的表現より圧倒的に精密で数多い、そういう社会に生まれ育ったのである、と推測できる(注3)。

既成の定型的表現が表す概念の適応事例が目前にあるとすること、つまり所与の目印(概念メルクマール)を事例において再認するという認知行為への異なる指向は、日独語における言語行為、言語的相互行為の差異を理解する上で重要な着眼点である。

以上のようなやや煩瑣な分類を試みるのは、上で部分的に虚構事例で例示したように、K1の言及対象であるK2の性質によって、言及可能な対象の質と量が多様に変化し、それが談話の組み立てに大きな影響を与えるからである(現実の事例による詳論は別の場所で行う)。これらK2の対象によるMKの類を図示する。

<談話におけるメタコミュニケーションの言及対象(K2)による区分>

A: 特定個別の出来事

A1: 現在進行中のコミュニケーション(KL)

A11: K2の発言者=KLの参加者(行為内的MK、この条件下だけ)

A12: 言及者=参加者ではない、目撃・傍観者(行為外的MK)

A2: 完結した出来事(KP): 全て行為外的MK

A21: KLの参加者は出来事(KP)の参加者

A211: 他のKL参加者もKPを体験した

A212: 他の参加者はKPの傍観者だった

- A213：KPを体験・傍観しなかった
- A22：KLの参加者はKPの参加者ではなく傍観・伝聞のみ、KPの参加者は既知
- A221：他のKL参加者も傍観・伝聞の場を体験した
- A222：他のKL参加者は傍観・伝聞の場を体験しなかった
- A3：参加者のだれにも関わらない出来事（伝聞・報道）
- B：任意一般に言及対象として（A3の部分的な下位分類としても）
- B1：語彙表現と関連の概念の関連項
- B2：各種の定型的表現の関連項
- B3：新規・形成中の表現の関連項

4. 展 望

本稿では、MKをできるだけ広範に、つまり生態論的に捉え、とりわけ対面談話におけるその様々な現れ方の類型を区分することを目指して述べてきた。これによって対象領域のある程度の見渡しができる仕組みができたと考える。しかし第2章で述べたようにMKは対面談話だけでなく、様々な実現経路において同じく多様な様態で現れる。したがって本稿の叙述もなお部分的なものに留まっている。以下では、今後の研究の進め方を念頭に置いて、とくに対面談話におけるMKの経験的研究に必要な要因について述べる。

ここでは紙面の都合で、日独語による現実の事例を取って用いず、構成事例や語句の例証にとどめた。理論的分類的な叙述を優先し、日本の読者のためにドイツ語社会の背景事情まで詳解した事例分析を挿入する余裕がないことが理由である。とりわけドイツ語における実際の談話事例（具体的にはその転写テキストと、一部は当事者による解釈記録）の分析を通じて、本稿で提起した概念装置の有効性を検証する目的で別稿を準備中である。そこでは日常的な対面談話の中で、進行中および完結した談話事象への関連づけがどのように行われるかを解明することになる。

さらにMKの関連領域（言及対象）のより詳細な意味論的区分も準備中の論究課題である。上でも示唆したように、類型を問わずMKの言及対象である相互行為事象は、大別して、①社会行動、②生理・心理過程、③記号態という相互行為事象（ことば、身振り、態度などなど）の3大側面に関わる。言及行為と言及対象のそれぞれとそれらの関連を生態論的に記述することで、たとえば日独語の社会文化の特質に新たな照明を当てることができるのではないかと考える。

もう少し先の課題としては、MK事象と論弁（議論）との関連を吟味することが挙げられる。「理想的には、意見だけでなく利害にも関わる差異を一命題において明示できるよう、共同作業をつうじて競い争う論弁」（丸井2006, 150）においては、争うためにも自他の発言を互いに関連づけることが重要であり、そのために特有のMKの行為手順

と表現手段が形成されてきた(3章1節の冒頭に近い箇所では列挙した表現を参照)。それらの刻印の深淺には社会文化的差異が想定される。

さらに先の課題としては、冒頭および第1章で示唆した長期的な時間範囲の(共同)省察とメタ認知・自己モニターの能力の発現である「汎メタコミュニケーション」の理論的な解明がある。この点では、文学コミュニケーション一般、とくに虚構の談話(仮設される言語使用)における顕在的潜在的なMK行為を評価することが重要である。さらには、試行的言語行為としての思考行為(Elias 1991)をも含めることが可能だろう。

「反省(する格好)だけなら猿でもできる」かもしれないが、反省内容を記号(言語)化して間主体的共同省察の主題にすることは、人間にしかできない行為である。

<感謝と追悼>

本稿はフンボルト財団(Alexander von Humboldt-Stiftung)の給費による研究滞在(2007年4月~7月)の成果の一部である。滞在と研究活動への多大な援助につき同財団に感謝する。引受先であり、本稿の作成を含め、研究と生活全般について大変お世話になったヴュルツブルク大学ドイツ語文献学研究所言語学部門のヨハネス・シュヴィタラ(Johannes Schwitalla)教授に感謝の言葉を述べる。とくにドイツ語対面談話の資料収集とその詳細な理解は氏の助力に負うことを明記する。

滞在中の5月22日、助言者であり友人であるフリッツ・ヘルマンズ(Fritz Hermanns、心性論的言語(史)記述、文化意味論、言語学的解釈学: Busse et al. hgg. 2005)が急逝した。5月4日に、本稿の主題を含め言語行為研究における解釈学的要因に関して氏と論議する機会を得た矢先であった。そのことも含め、1980年以來の長年にわたる助言と友誼に感謝すると共に、心より哀悼の意を表したい。

注

(本稿でも文献指示や論旨に関連の深い注釈などは、できるだけ本文中に統合する方式を採用した。以下ではそれに該当しない事項や、本文中ではあまりに煩雑になる事項のみ記載する。)

- 1) 最近のドイツ語圏でのMK関連の研究動向については別稿で取り扱う予定だが、一点だけ指摘すると、当該用語が、啓蒙的な教育コンテキストやコミュニケーション相談業務(トレーニング)などでも多用されることも一因として、言語学的な談話研究者達はこの用語を避ける傾向にある。さらに、研究領域と対象を細分化し独自に命名することで自己の領域(縄張り)を確保することは、研究活動上のhabitusとなっていることも指摘される。北海の海水浴場に見られる「砂の城」(Sandburgen: 自分の籐椅子とパラソルの周りに砂の壁を築き領域権を明示する)の心性とも共通する可能性がある。筆者は関連の様々な事象が人間に普遍的かつ固有の能力に由来することを確信しているので、この用語はそれらを広く眺め渡すためには不可欠であると考える。
- 2) この辺りの叙述は筆者が指導した卒業論文『日本語「かわいい」の使用における男

女差～「かわいい」と呼ばれたくない男性～』（高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科国際コミュニケーションコース2006年度、森本聖子）によっている。論者は現今の「かわいい」の無差別な使用は言語表現と言語行為における歴史的なジェンダーイデオロギーの束縛を女性達が打ち破ることに当たるとする。

- 3) おそらくどの言語社会でも否定的評価のMK表現の方が多いのかもしれない。非対称的権力関係をも含む通常性は遵守されるときよりも毀損されたときに明確に意識化される。もっとも、丸井（2006, 175-177）でも述べたが、ここに列挙した類の「見下した」MK表現は、その対象とされる人物の性格や行動の性質よりも、むしろより多く、発話者である「俺様」や「あたくし」の権威感を表現するためであると見る方が妥当であろう。言語表現の意味における「認知、情動、意志」の次元については Hermanns（1995）を見よ。

文 献

<欧 文>

Bastian, Sabine (2002)

"J'allais dire ...Ich sag' mal..." Formen und Funktionen metakommunikativer Kommentierungen in mündlicher Argumentation, Bastian, S./ Hammer, F. (Hgg.): Aber, wie sagt man doch so schön..., S. 49-62, Frankfurt am Main

Bublitz, Wolfram (2001)

Formen der Verständnissicherung in Gesprächen, Brinker, K./Antos, G./Heinemann, W./Sager, S. (Hgg.): Text- und Gesprächslinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1330-1340, Berlin/ New York.

Busse, D. /Thomas Niehr, T./Wengeler, M. (Hgg.: 2005)

Brisante Semantik - Neuere Konzepte und Forschungsergebnisse einer kulturwissenschaftlichen Linguistik, Tübingen. (=Busse et al. Hgg. 2005)

Habscheid, Stephan (2003)

Sprache in Organisation, Sprachreflexive Verfahren im systematischen Beratungsgespräch, Berlin/New York

Hermanns, Fritz (1995)

Kognition, Emotion, Intention-Dimensionen lexikalischer Semantik, Harras, G. (Hg.): Die Ordnung der Wörter, 138 - 178, Berlin.

Hermanns, Fritz (1995a)

Sprachgeschichte als Mentalitätsgeschichte, Gardt, A./ Mattheier, K. J./ Reichmann (Hgg.): Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen, 69-101, Tübingen.

Hermanns, Fritz (2003)

Interkulturelle Linguistik. Wierlacher, Alois/Bogner, Andrea (Hgg.) Handbuch interkulturelle Germanistik, 363-373, Stuttgart/ Weimar.

Hermanns, Fritz (2003a)

Linguistische Hermeneutik - Überlegungen zur überfälligen Einrichtung eines in der Linguistik bislang fehlenden Teilfaches -, Linke, A./Ortner, H./Portmann-Tselikas P. R. (Hgg.) Sprache und mehr: Ansichten einer Linguistik der sprachlichen Praxis, 125-163, Tübingen.

Marui et al. (1996)

Marui. I. / Nishijima, Y. / Noro, K./ Reinelt, R. /Yamashita, H. : Concepts of communicative virtues in Japanese and German, Hellinger, M./Ammon, U. (eds.): Contrastive Socio-linguistics, 385-409, Berlin, New York.

Marui, Ichiro/Schwitalla, Johannes(2004)

Telefongespräche beginnen (und beenden) deutsch-japanisch kontrastiv, 『かいろす』, 42号、14-59, 2004.

Spranz-Fogasy, Thomas(2002)

Interaktionsorganisation als (meta-)kommunikative Ressource des Argumentierens, Bastian, S./Hammer, F. (Hrsgg.): Aber, wie sagt man doch so schön..., S. 11-25, Frankfurt am Main

Schwitalla, Johannes (1979)

Metakommunikation als Mittel der Dialogorganisation und der Beziehungsdefinition, Dittmann, Jürgen(Hg.):Arbeiten zur Konversation-sanalyse, 111-143, Tübingen.

Techtmeier, Bärbel(2001)

Form und Funktion von Metakommunikation im Gespräch, Brinker, K. /Antos, G./Heinemann, W./Sager, S.(Hgg.):Text- und Gesprächslinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1449-1463, Berlin/ New York.

Tiittula, Liisa (2001)

Formen der Gesprächssteuerung, Brinker, K./Antos, G. /Heinemann, W./ Sager, S.(Hgg.):Text- und Gesprächslinguistik. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1361-1374, Berlin/ New York.

<和 文>

川島敦夫 (編: 1994)

項目「Metakommunikation」、ドイツ言語学事典、588-589、紀伊國屋書店

西島義憲 (2000)

「コミュニケーション行動評価概念研究のための予備的考察－対照社会言語学の視点から」、金沢大学経済学部論集、20-1号、107-132

西島義憲 (2000a)

「伝達動詞の日独対照の試みー小説およびその翻訳を利用して」、文体論研究（日本文体論学会）、46号、42-60

西嶋義憲（2003）

「『へりくだり』とDemutの比較ーカフカのテキスト『変身』を例にして」、ドイツ文学論集（日本独文学会中国四国支部）、36号、61-71

丸井一郎（2004）

「『文学テキスト』再考ー異文化テキストの理解のためにー」、ドイツ文学（日本独文学会）2巻第5号（通巻115号）、16-29

丸井一郎（2005）

「メタコミュニケーションの行為と表現」、高知大学学術研究報告、第54巻、13-20

丸井一郎（2006）

『言語相互行為の理論のために』、三元社